

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	くまもと芦北通園センター		
○保護者評価実施期間	2025年 12月 1日		2025年 12月 26日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	2家族3名	(回答者数) 2家族
○従業者評価実施期間	2025年 12月 1日		2025年 12月 26日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	10名	(回答者数) 10名
○事業者向け自己評価表作成日	22026年 3月 2日		

○分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	<ul style="list-style-type: none"> ・事業所スタッフに、看護師を手厚く配置している ・医療的ケア児や重度障害のある利用者も安心して通所できる ・バイタルチェックや服薬管理が適切に行える ・てんかん発作や呼吸管理が必要な方にも適切なケアを提供できる ・家族とともに医療・介護計画を検討し、在宅生活をサポートできる ・看護師が送迎車輦に添乗し、車中での医療ケア(吸引など)や体調不良時に対応できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動内容の工夫(年齢・特性に合わせたプログラムの提供) ・個別や集団などを組み合わせ、様々な活動を実施 ・登園時の健康チェック(検温・SpO₂の測定・状態確認) ・吸引・景観栄養など医療的ケアが可能 ・安全を確保しながら活動を実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・幅広い年齢層のご利用者との交流や関わり ・スタッフ間で行う支援者会議による支援内容の共有 ・家族のレスパイトに繋がる利用の調整 ・五感を使った活動の実施により体験を増やす ・ご利用者に「楽しい」と感じて頂けるような活動の実施
2	<ul style="list-style-type: none"> ・医師を配置し、併設の外来及び入所施設(病棟)に常勤医師が在籍しており、医療機関として緊急時に対応できる ・医療的ケア児や重度障害児者に対する経験豊富な医師や看護師の存在が「安心材料」となり、利用を継続しやすい ・早期対応により、重症化を防ぐことができる ・医師が直接診察・判断し、必要に応じて適切な医療機関へ引き継げる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ご利用者のご利用中に状態が変化した場合、早期対応が可能 ・小さい子ども向けのクッション材や角の保護 ・年齢や障害特性に応じた専門職を配置(保育士・介護福祉士・看護師・機能訓練指導員など) 	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者の健康状態を医療的視点で把握し、適切な生活支援につなげる
3	<ul style="list-style-type: none"> ・事業所スタッフに医療型障害児入所施設での経験を積んだ理学療法士が在籍 ・看護師・介護士・リハビリ職・福祉スタッフと連携しながら、適切な支援計画を立案できる ・利用者の状態に応じたリハビリやADL(日常生活動作)の維持・向上を図れる 	<ul style="list-style-type: none"> ・PTやOTと連携した姿勢管理 ・食事の形態や介助方法を工夫 ・多職種連携の強化(異なる年齢層のニーズに応じて、スタッフ間の情報共有を密にする) 	<ul style="list-style-type: none"> ・嚥下しやすい食事の提供と栄養バランスを考慮した食事の提供 ・車椅子や歩行補助具を使用する方が動きやすい広い動線の確保

	事業所の弱み(※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	<ul style="list-style-type: none"> ・児童(児童発達支援対象者)と18歳以上(生活介護対象者)が在籍する多機能型通所事業所であるため、ご利用者の年齢幅が広く、支援内容の調整が難しい ・個別支援計画の作成方法やモニタリングの基準が異なり、支援の目的や内容も異なるため、プログラムの調整が難しくなる ・児童、放課後等デイサービス、生活介護、のご利用者が一緒に空間で過ごしており、運営基準や報酬体系が異なるため、管理が複雑になる ・看護師の配置や医療的ケアの対応が必要な場合があり、側隠の負担や人員体制が課題 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童(児童発達支援対象者)と18歳以上(生活介護対象者)では、福祉用具や安全対策の違いで、設備面の工夫が必要 ・ご利用者の障害に差があり、個々にあった対応や医療的ケアが必要 ・家族や関係機関との連携の複雑化 ・活動支援に人手が不十分な場面がある 	<ul style="list-style-type: none"> ・支援計画の工夫(年齢や支援レベルに応じた個別活動の導入) ・職員研修の強化(両サービスの基準を理解し、適切な支援ができる体制を整える) ・関係機関との連携強化(成人利用者の今後の支援方針を考慮し、適切な支援計画を立てる)
2	<ul style="list-style-type: none"> ・重度の障害をもった方のご利用がほとんどで、利用実績が少ない ・体調を崩しやすい利用者が多いため、利用予定者全員が揃うことが少ない ・ご利用者の利用予定日であっても、当日に体調不良で利用をキャンセルとなる場合も多い 	<ul style="list-style-type: none"> ・他事業所(保育園や福祉施設)との連携内容が異なるため、情報共有の方法を工夫しなければならない ・多機能型事業所のため他事業の利用者数との調整が必要 ・利用実績を増やせるような検討が必要 ・ご利用者や家族の希望で、利用希望の曜日に偏りがある 	<ul style="list-style-type: none"> ・相談支援の充実(各年齢層に応じた今後の生活支援やサービス利用についてアドバイス) ・家族との情報共有を徹底(特に、児童と高齢者では家族の関わり方が異なるため、個別の対応が必要)
3	<ul style="list-style-type: none"> ・地域性により送迎に長時間を要する ・地域支援との連携 ・悪天候時(豪雨・積雪など)は送迎の遅延や中止のリスクが高まり、利用者や家族の不安が増す 	<ul style="list-style-type: none"> ・複数のルート进行调整する必要があり、送迎計画の作成や変更対応が複雑になる。 ・渋滞や交通規制により送迎時間が変動し、スケジュールが乱れる。 ・乗降時の転倒や事故のリスクが増す ・他の利用者との関わりに配慮しながら送迎する必要がある ・ご利用者によっては送迎時間が長くなる 	<ul style="list-style-type: none"> ・送迎ルートやシステムの最適化(柔軟な送迎体制の確立、送迎時間の調整) ・利用者の状態に応じた柔軟な送迎時間の調整 ・送迎にかかる燃料費・車両維持費・人件費の負担が大きい移動や乗降に時間がかかる方もいて、スムーズな送迎計画が必要